

研究

幕末・明治維新の佐伯藩

会員 佐 脇 貫 一

△幕末・維新の史料から

慶応元年、先生は十五歳にして初めて壯途に就き、藩主の左右に侍する側近を命ぜられた。当時日蹙に王政復古の大業が將に成らうとして、大変乱の嵐が波濤の如く全国に渦巻き始めた激動のまつた中であつた。幾何もなく、徳川慶喜の政權返上となり、王政復古となり、明治元年一月には鳥羽伏見の戦が起り、二月五日には幕府親征の詔が下された。各藩主とも皆急に上洛朝覲することとなり、佐伯藩主毛利高謙若も遽に京都に向つて出發し、先生も扈從して入洛した。

その頃朝廷も維新軍々の際であるがため、親兵と称するものもいふに足りず、軍制も殆ど整はなかつたが四月十九日列藩に賦課して陸軍を編成することとなつた。即ち兵部省は藩の大小に依りて一定の兵を徵集するに決したので、佐伯藩からもまた青年五六名を撰んで差出したが、先生もまたその中の一人に加へられた。

(龍溪矢野文庫長伝より)

幕末から明治維新にかけての動乱期に、わが佐伯藩はどんな立場におり、また藩としてどんな行動をとつていたのだらうか。私たちがこの時代における藩史料をもたないため、鶴藩路史、佐伯古老物語、佐伯志(佐藤鶴谷著)

佐伯卿土史(増村隆也著)などに散見するものからその片鱗を察知するだけだが、わずか百十数年前の歴史があからまないで甚だこころもとない。そこで手持ちの史料から総合的に當時の姿相を描いて見よう。まず矢野龍溪伝から慶応、明治初年の先生の事績を引用し(前掲)、同時期の記録を二、三抜粹する。

○万延元年(一八六〇)正月十日 水戸家臣鯨沢伊太夫罪あり、幕府我が藩に鯛す。藩は物頭岡矢邦経をして佐伯に送る。(文久二年赦に遡り)

○文久三年(一八六三)四月朔日 朝廷嚴しく海防の事に就いて命令あり。五月砲台を久部村と向島に作る。久部村のもの足録を用い一射して炸裂して用いられず。向島のもの足録を用い皆充用するに足る。

○元治元年(一八六四)七月十二日 幕府我藩の仙島警備を罷め、更に道玄坂関門を守らしむ。(慶応元年正月罷む)

○同 年十月二十七日 公(高謙)佐伯を發し京都に行き、十一月二十五日直々 陛下にお目にかかり御杯を賜わる。

○慶応元年(一八六五)四月 東照宮二百五十年祭、京都榎井門跡を日光に迎之、高謙慶応役をつとめ、終つて佐伯に帰る。

○慶応二年(一八六六)二月 諸侯初めて地方の物を朝廷に献じた。是において公は判紙二千枚を献上した。

○明治元年(一八六八)三月三日 朝廷大いに諸侯を会し、公(高謙)また京都に朝す。四月八日 藩邸を京都聖護院村に移す。

○明治二年(一八六九)六月 諸侯と共に封土を朝廷に帰す。同二十三日 公佐伯藩知事となり華族に列す。(以上鶴藩路史、佐伯卿土史による)

文久二壬戌年江戸定府の面々佐伯に御差下し仰付られ候に付、後田(大田中)に屋鋪地下げ置かれ、家作も上より御建築なされ、出来の上銘々下し置かれたり。右家屋御作事奉行は古田潜仰付られ、慶応四戊辰年迄定府の面々残らず罷下りたり。」

(佐伯古老物語)

慶応四戊辰年正月 徳川慶喜公東帰し玉ひて、京都太政官より国政仰出され候に付、江戸三屋敷、御上屋敷愛宕下佐久間小路、御下屋敷広尾渋谷内白金今里村残らず四月中に御引拂ひに相成り、詣道具等大廻りにて佐伯表へ積み下しなさらる。」

(同)

慶応二丙寅年七月、豊前小倉小笠原左京大夫榎へ長州勢攻入り小倉城落城す。同八月二十一日、軍目付森川主税殿、豊前中津表より去る十六日差立し飛脚昨夜当地に着し候に、御用の義これ有り候間、御留守居の者一人、豊前中津御陣所に早々罷越候様仰せ越され候に付、御用人箕川長兵衛に仰付られ、同二十五日出立、彼地へ罷越し御用何相伺ひ九月九日罷帰り候。右日方一長州人中津表に乱入致し候はゞ、御差四次第早速御人数差出し候様仰付られ候なり。」

(同)

△幕末という時代の様相

いわゆる幕藩体制は崩壊の危機に瀕した。嘉永六年(一八五三)六月、米東印度艦隊司令長官マシニュー・ペリーが軍艦四隻をひきいて浦賀沖にあらわれ、米大統領の国書をもたらし、日本に開国を求めた。黒船の来は幕府を狼狽せしめたのみならず、この報が各地に伝わるに、未曾有の困難米と騒がれた。ペリーの威嚇政策は功を奏し

て、幕府は多年の禁を破って米の国書を受理し、ここに祖法として固守してきた鎖国の壁の一角が崩れ去った。(日本百年の歩みから)。かくて嘉永七年三月の日米和親條約、同年八月の日英条約、安政元年十二月の日露和親條約、安政二年十二月の日蘭通商条約改正、安政五年六月以降の日米、日蘭、日露、日英、日仏各修好通商条約など一連の対外条約が締結された。

幕府の多年の懸案であった対外問題は一念の決着と見たが、朝廷の不承認のまま条約に調印したことが政治問題となつてあらわれた。朝廷と幕府は正面から対立し、開港による外国貿易は経済界を未曾有の混乱におとしいれた。加えて南海道、近畿、江戸に大地震、安政五年にはコレラが大流行するなど災害、疫病が続き、物価は騰貴、人民の生活は窮乏した。こうした時代の反動として激烈な攘夷運動が誘発され、大老井伊直弼の反対派弾圧政治が展開、安政の大獄がおこつた。(日本百年の歩みから)。

この時代の豊後と藩は府内、村築の二藩が徳川譜代、日出、臼杵、佐伯、岡、森の五藩が外様大名だつた。しかも譜代の府内藩主松平道説(大給松平)は幕閣の若年寄になり、村築藩主松平親永(能見松平)は元治元年の長州征伐に従軍して幕府要人であつた。外様五藩のうち尊王派の岡藩主中川久昭を除く、日出の木下俊應、臼杵の稲葉久運、佐伯の毛利高謙、森の久留島通精らは二百数十年におよぶ幕政下に馴致された藩のあり方として、何よりも御家大事と、佐幕にあらざ、尊王にあらざ、全くの日和見主義といつてよかつた。

安政二年(一八五五)六月、幕府は諸大名、旗本に洋式訓練を命じた。そこで佐伯藩主毛利高泰は翌三年二月、竟護寺で藩兵の英國式訓練を観閲した。井伊直弼の反対派弾圧によつておこつた安政の大獄は、安政五年(一八五

ハ)六月の將軍継嗣問題に端を祭し、八月孝明天皇が幕府の対外条約締結に不満の勅諭と水戸藩に下したことが導火線となつた。安政六年八月、勅諭降下の主役で尊王派である水戸藩京都留守居鶴岡吉左衛門父子は捕えられ、死罪、獄門、江戸家老安島帯刀は切腹、勘定奉行船沢伊太夫は遠島になつた。鶴岡政史万延元年の項にある「水戸家臣船沢伊太夫罪あり、幕府我が藩に銅す。」がこの事件で、藩士西矢藤右衛門(邦経)が護送役であつた。井伊直弼が大老として幕閣の首班であつたこの時代、彦根井伊家の支藩越後と板藩主井伊直嗣の女貞松院を母とする奥房守高森の佐伯藩は、佐幕派と見られていたので目なかつたあうか。

しかし万延元年三月三日(正確には安政七年、三月十八日)に改元、井伊大老が水戸、薩摩浪士の左め榎田門外に殺害され、井伊政權が倒壊すると、幕府の權威は失墜し、公武合体による朝幕の緩和政策がとられるようになった。坂下門事件と契機に反幕的空気が助長された。この間佐伯藩では安政四年十月に鶴城(鶴居城)の修補が行われ、万延元年十一月には三ヶ丸城館の屋舎が竣工した。そして文久二年八月には預り人船沢伊太夫が赦免された。どうやら佐伯藩にも時代の風が隙間から吹きこむようになっていた。

△佐伯藩と毛利高謙

佐伯古老物語に「文久二年戊辰年江戸定府の面々佐伯に御差下し仰付られ候とあり、これら佐伯に帰つて来たる藩士たちのため大田中に屋敷地をやり、家屋まで建築してやうとと記録している。これ日この年間八月二十二日幕府が参勤交代制度を緩和し、諸大名家族の藩地在住、

定府藩士の帰藩を許したからで、佐伯藩では翌文久三年二月の高謙(十二代)の就封、老侯(十一代高森、二年十二月退隱)の依伯帰還とともに定府藩士の帰藩が行われ、慶応四年までに全員が引上げた。

佐伯藩は中村の大工田村太三郎を大匠に遣わし砲台構築の術を学ばせ、文久三年五月、女島新津洲に砲台を築き、銚工西村某(益西村源記)、中尾某を江戸より呼びよせ、久部村で数門の大砲を鍛造したが、これは鍋鉄に陶器の破片を細末にしたものを混ぜて造つたため、ただ一発の試射で砲身が炸裂してしまつた。その後治工沢田喜三郎(下中島下居住、銃砲工)を江戸より召し、向島で鍛造したものは銅を用いたため炸裂せず、成績良好であつた。これと前後して野砲、小銃の鍛造が下中島で行われた。

(佐伯御土史)

これは鶴藩史文久三年五月の項にある記録を詳述したもので、略史には続いて八月二十日「西谷小路の火薬製造所が火を祭し(爆祭)開山十郎ら五人が焚死」、また同年十二月十日「虚空殿堂下の火薬製造所が火を祭し、黒田潤吉焚死、沢谷節二郎重傷す」とあつて、鍛造した銃砲用の火薬製造所が爆祭して、死傷者が出たことを記録している。

佐伯藩は幕命により江戸海防の任につき、佃島に防備をしていたが、元治元年(一八六四)七月十二日この任を解かれ、道玄坂關門の警備についた。(文久四年四月二十日、改元して元治元年)、二年十月二十七日、佐伯藩主毛利高謙は上洛、十一月二十五日参内し孝明天皇に参詣、御林を下賜された。この高謙の上洛、参内がどういふ理由によるものであつたか、記録されていないが、当時の事態から考えると、同年七月十九日の禁門の變(蛤御門の戦い)

で敗退した長州藩日いよいよ反幕的立場に迫りこめられ、これに代へた薩摩藩が將軍(十四代家茂)後見役で禁裡守衛總督の任にある徳川慶喜と提携して、時代の聲を聞きつとめ、八月二日幕府をして長州藩征討を諸大名に命じたこと、へより第一次長州征伐の勃発と關係がある。幕府が長州藩親征(將軍親征)を布告したのは八月十日で、征長總督徳川慶勝に薩摩藩の西郷隆盛が萩藩へ長州藩へ恭順の宴をおげさせるようすめたのが十月二十四日、その翌二十五日征長先鋒隊が大坂を出発した。この事変で征長總督徳川慶勝の本營がおかれたのは広島で、十月二十五日以後の征長軍事はここで執行された。毛利高謙の上落日おそらく禁裡守衛總督徳川慶喜の召集によるものでないだろうか。鶴藩略史の記載によれば、十月二十七日、公佐伯を祭し京都に行き、い、い、いとしてある。とすれど十月二十七日現在に高謙が京都に居たことにはなるから、高謙は禁裏守衛の一員を命ぜられたと解することが出来る。第一次長州征伐は十一月十一日に長州藩が益田右衛門公三家老に自刃を命じ、十二月五日毛利敬親父子が幕府に謝罪書を出し、その服罪が決つて親征が停止され終焉した。高謙の参内は十一月二十五日、第一次長州征伐の見通しがついてからである。佐幕とも尊王とも旗色の分明でない佐伯藩だが、東九州の一隅に存在する二万石の小藩なれば、これはいたし方ない態度といえるだろう。

△ 養賢寺の鼎州和尚

長州征伐については養賢寺十七世鼎州文隆の事績が伝えられてゐる。それは安政三年二月、十七世住持を退隠した鼎州和尚が征長總督になつた尾張大納言慶勝の知遇

をうけて、元治元年十月、慶勝の意きうけて長州に使し萩の毛利家の支藩である岩國藩主吉川経幹(監物)に会い、皇國の情勢を説いて大守毛利敬親父子の恭順をすすめ、吉川経幹の盡力によつて敬親父子を動かす、ついで益田、福原、国司の三家老を自刃させて恭順の意を表させたこと、さらに鼎州が三家老の首級を總督本營に致して第一次長州征伐を中止させたといふものであるが、長州藩主毛利敬親に恭順をすすめたのは吉川監物として、吉川監物に働きかけたのは西郷隆盛の勸告で、總督徳川慶勝が使者を遣つたといふおれから、鼎州和尚の登場も自然ではないが、これを証するものが無い。

これとも徳川慶勝が振装、文台、親箱、書と鼎州に贈り、さらに五十石の扶持を与えたといふから、尾張使の知遇をうけたことははっきりしている。なお正文によると三家老益田右衛門公(名は親龍)、福原越後(名は元簡)、国司信濃(名は親相)が自刃したのが元治元年十一月十一日、この三家老の首級は十三日家共志道安房が広島に持参、十四日總督徳川慶勝の代理尾張藩家老成瀬隼人正に渡したという。増村氏の佐伯郷土史は鼎州をして三家老の首級を大坂へ運ばぬ島に持参してゐるが、この第一次長州征伐にさいして鼎州が何らかの役割をつとめていたとしても、長州藩が藩主恭順の証である三家老の首級を、一介の使僧に托して總督府にことけるは十分あり、この点鼎州和尚の事蹟について考へて見る必要がありそうである。

△ 第二次長州征伐と佐伯藩

元治元年十一月二十五日、京都御所に参内して孝明天皇に拜謁、御林を賜つた佐伯藩主毛利高謙は、十二月五

日長州藩主毛利敬親、広封父子が幕府に謝罪書と提出したため、諸藩による禁裡守衛の仕が解かれたので、幕命によつて江戸に参勤した。元治二年正月二日、幕府は道玄坂関門の警備を廢した。(佐伯藩が警備についていた) 四月七日改元して慶応元年となり、同十三日に長州藩再征の命が下り、征長軍が再編成され、和歌山藩主徳川茂承が先鋒総督に任命された。一方幕府では將軍家茂が征長のため江戸城を出発することになつていたが、四月十七日が東照宮(東照神宮、徳川家康、元和二年四月十七日歿)二百五十生忌にあたるので、日光で年忌を修するこゝとなり、京都から梶井門跡を日光に迎えた。毛利高謙はその饗応役を命ぜられ、江戸滞在中の門跡一行の饗応を果した後、佐伯に帰藩した。將軍家茂が江戸城を出発したのは五月十六日、それから十数日後の閏五月一日には土佐の坂本竜馬が長州藩士桂小五郎と会谈、薩長和解をはかり、同二十一日に薩長の妥協が成り、提携を約定した。その翌二十二日將軍家茂が入洛参内して長州再征を委上したが、なかなか勅許は下らなかつた。時代はこのように目まぐるしく変転したが、佐伯藩は風波の外高謙は佐伯にあつて時世を傍観していたが、九月にはたつ藩内巡視と思ひ、北は津久見、南は薩江浦波当津、西は因尾村徑野峯とくまなく巡回、民情を視察した。幕府が勅許を得て長州再征のため房根藩以下三十一藩に出兵を命令したのは慶応元年十一月七日であつたが、命をうけた諸藩は必ずしも出兵するとはいえなかつた。二年一月二十一日には坂本竜馬の開旅で薩長連合の盟約が結ばれ、四月十五日には薩摩藩主島津忠義が幕府に書面を送り征長の不可を論じ、薩藩の出兵を拒絶した。しかし幕府は五月一月毛利敬親父子に更罰令を下達し、六月五日征長先鋒徳川茂承が広島に到着、山陰、山陽、四

國、九州の三十余藩を動員して防長の四境包圍を企画し、同八日征長の勅許を諸藩に伝達、長州藩に宣戦の布告をした。

佐伯藩主毛利高謙は、前掲鶴藩史引用のように慶応二年(一八六六)二月、諸藩侯とともに地方の物(領内の産物)を朝廷に献上することにあり、佐伯判紙二千枚を献上した。これは幕府の統制下を脱し得ない小藩の立場ながら、朝廷とめぐる雄藩の動きを見て、時世におくれないための布石であつたとおれよう。七月京都にあつた將軍家茂が病歿、同二十日に死去、徳川慶喜が將軍職を継ぐことになつた。この月長州藩兵は海を渡つて豊前小倉を攻撃、八月一日小倉城を陥落させた。佐伯古老物誌慶応二年七月「豊前小倉小笠原左京大夫楳へ長州勢攻入り云云」の記事(前掲)はこのとき、中津藩の幕府陣所にいた軍目付森川主税が佐伯藩に命令を示達したことを記録したものである。八月十六日に中津陣所から森川がよこした飛脚は二十日夜佐伯に着き、その書面どうけ大藩行は御用入實川長兵衛に中津出向を命じ、實川は二十五日佐伯を出発、中津表に行き命令をうけたが、九月九日はいたつて佐伯に帰着した。命令は四万一長州人が中津表に乱入したならば、差圍するから早速入敷と差出すというところから、長州藩兵の小倉攻略という事態に對応するものであつたが、それまで公表されていなかつた前將軍家茂の喪を以てしばらく征長停兵の勅命が幕府に降下し、九月四日には征長先鋒総督の徳川茂承が広島を出発東上、征長軍が撤兵を開始したので、中津陣所にあつた幕府の軍目付森川主税も当然陣所を撤廢しなければならぬ事態になり、佐伯藩から派遣された實川長兵衛も命令はうけたものの、要領を得ず中津を出発、九日帰藩したまのと思おれる。

△ 明治維新を迎える

慶応二年十二月二十五日、孝明天皇が崩御され、三年一月九日、睦仁親王（明治天皇）が政祚された。

慶応三年十月十四日、將軍徳川慶喜が大政奉還の上表を提出、同十五日朝廷は大政奉還の奏請を教許し、十万石以上の諸侯に召集命令を出した。同年十二月九日、王政復古の大号令發布、同十二月十四日、王政復古を諸藩に布告、慶応四年一月三日、鳥羽伏見の戦い、同十日、朝廷旧幕府領地（公領）の直轄を布告した。

佐伯にあつて時代の動きをじつと眺めていた藩主高謙は、二月三日幕府親征の詔が發せられたへ矢野龍溪伝では二月五日）ので、上洛することになり、下旬佐伯を發ち上阪、三月三日上洛、諸藩主と共に参内、朝廷に忠誠を誓った、この年四月十九日朝廷は諸藩に賦課して陸軍を編成したが、矢野文雄先生が徵集の親兵隊長となつたのはこのときのことである。なお四月八日佐伯藩は京都聖護院村に藩師を移している。

これまで述べてきたように、幕末から明治維新にかけての佐伯藩の立場は、佐幕でもなく尊王でもなく、また日和見的態度ともいしかねる微妙なものであつた。ことに藩の教育はいわゆる儒学、朱子学派で封建教育といつてよかつたから、寛範高標のようには漢洋の学に理解をもつた好学者の藩主があつても、蘭学者といふほどの人物は藩中に一人も出なかつた。また藩内領民の気風は温厚、藩史に残るほどの紛争、騒動は少なかつた。従つて維新の志士といわれる勤王家はなく、わずかに藩領内にある公領聖田村村江に生まれた青水猛比古が、佐伯を代表する唯一の勤王志士になつてゐる。

青水猛比古は柏江の農清助の子で、天保二年三月の生まれ、七歳のとき鶴望村の禪刹海福寺の徒弟となり、嘉永五年二十二歳のとき出奔、大坂にいらり還俗、髪を蓄え刀を佩き浪士の群に投じた。安政元年神祇伯白川王家に仕え、資訓の知遇をうけ、国学、神典に對する目とみひらいたようである。文久三年八月十九日、三條実美ら七卿が京都を逃放され、長州に落ちたとき、猛比古は護衛親兵の一人として長州に入り、高杉晋作の奇兵隊に属したという。慶応三年正月、日田入長三洲や宇佐の佐田喬らと画策した御許山義兵は、木ノ子兵衛謀の段階で破れたので、猛比古は花山院家理推戴のため上洛、京阪の間にあつたが、三月あるいは六月某日、幕府の偵吏に暗殺された。年三十七歳。

慶応四年九月八日をもつて明治元年となつた。この九月、佐伯藩では物頭松水筑之龍（ぬづき）に代つて、秋月福門の（こと）と竹中寛が徵士として新政府に登用された。水筑之龍は谷河原知事となり、まだ任地に赴かぬうちに鎮守府に属し、辯事に任じ、ついで葛飾県知事に転じた。竹中寛（通称馬之丞、字は栗卿）は公儀人となり、京都から江戸に行き、葛飾県出仕となつたので公儀人を辞任した。なお竹中氏の岩手県榎参事になつた。同年十二月六日、政府は公議所開議を布告し、十日各藩に公議人一人を選出するよう令達した。佐伯藩では番頭古川頼（仁左衛門）が公議人となり、明治二年三月公議所開設に出席した。この年一月二十三日、薩長土肥四藩主が版籍奉還を奏請し、六月十七日朝廷は版籍奉還を聽許、各藩主を知藩事に任命した。同二十三日、藩主高謙は佐伯藩知事となり、華族に列し、籍を東京に置いた。

（この項 終）